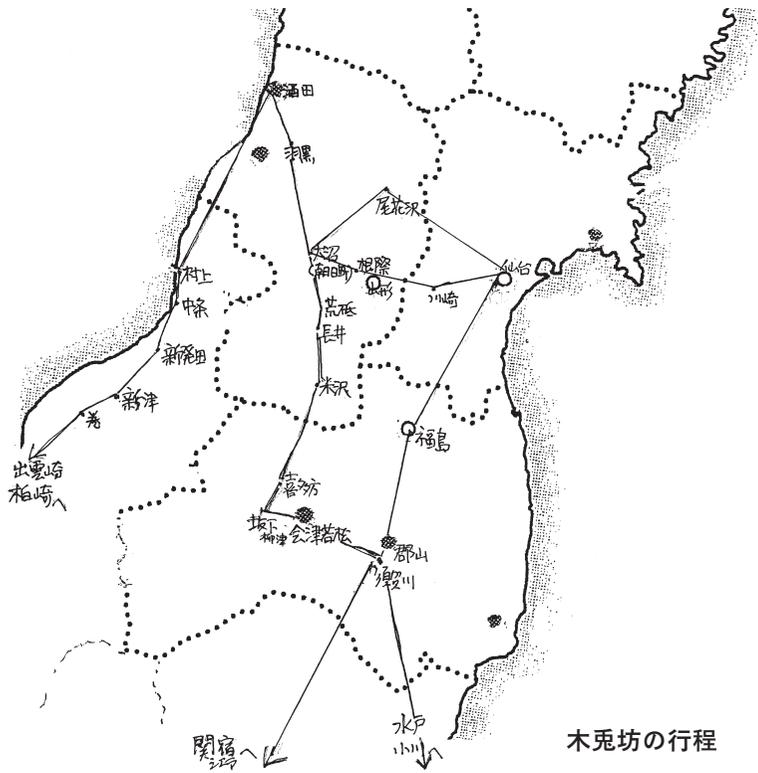


『二度の笠』（安永四 木兎坊風石編）の入集者

——木兎坊奥州行脚について

服部直子



木兎坊の行程

はじめに

『二度の笠』は、尾張の俳人木兎坊風石の東北行脚記念集である。まず簡単に書誌を示す。

半紙本一冊（二二・八×一六・二糎）三七丁。薄縹色布目地型押表紙。中央題「二度の笠」。京菱屋治兵衛・名古屋菱屋久兵衛刊。

木兎坊風石編。安永四（一七七五）年九月六林序。自跋。藤園堂文庫蔵。

编者「木兎坊風石」は横井也有の門人を自称する俳人。序を書いている「蝙蝠庵六林」は、也有の長年の知友堀田六林である。本書については、俳文学大辞典に立項がなく、野田千平氏は、後述する戦前の記事などをふまえて、木兎坊およびその行脚について次のように触れておられる。

木兎坊は宮地姓、桂坊幽篁の別号もあり、享保八年生、天明五年没、享年六十三歳であった。尾張藩士であったが明和七年四十八歳、也有の家来石原文樵の手で剃髪し、也有の庵に出入りして也有門人を自称した。明和八年の奥羽行脚と安永三、四年の奥羽・北陸行脚を果たし、記念集『二度のかさ』を上梓した。「出羽の青菰から鸞窓へ——大沼の浮島稲荷奉納俳額をめぐって——」

『近世東海俳壇新攷』（若草書房 二〇〇二）所収）これは、出羽国大沼の鸞窓に関する資料紹介および論考における記述

で、以下『二度の笠』を引用して木兎坊の行脚における鸞窓とのかかわりなどが紹介されている。

木兎坊は二度にわたって奥州行脚を行っている。多くの俳諧師と同じく松島など『奥の細道』を辿るのであるが、各地の有力俳人を訪ね、地元の有力量宅に長期滞在をしている地もあり、かなり周到な用意をして旅立ったと考えられる。この行脚のルート及び訪問先はいかなる知友のつてによって成り立っているのか、またその背景はどのようなものなのか、を考察するのが、本稿の目的である。

一 木兎坊風石について

まず木兎坊風石自身については、名古屋短歌会『短歌』昭和九年三月月号所収の鬼頭満夫氏の「木兎坊風石」が、ほぼ唯一の伝記的紹介である。当時は木兎坊の知友で追悼会も開いた後藤路好の子孫宅に位牌や軸・文章など具体的な資料が伝存していたらしく、鬼頭氏は『二度の笠』の記事とそれらの資料に基づいて紹介しておられるが、その後散逸したのか、現在は数十年以前に書かれた、

表面

桂光院幽皇風夕居士

行称院妙善信女

裏面

文化三年丙寅 十一月十日

天明五年乙巳 六月廿三日

とある位牌のメモ以外は、詳細不明である。鬼頭氏の調査によれば、本住寺の過去帳及び其後後藤氏の家から見出した木兎宛の手紙によると桂坊幽篁なる人は宮地姓である。

とされ、後藤家と宮地家がかつて姻戚関係にあったことから「遺物一

切」が残存しているのであろう、と推測された。また、尾張藩士であったという推定は、六林の序に、「官途に往来せし」とあることによるが、『士林沂洄』に宮地姓はなく、尾張藩藩士名寄等にも宮地姓で年代上合致する人物は確認できない。藩士であるとしても陪臣か、少なくとも由緒ある家柄ではなく、也有が言うところの、

木兎坊は予が草廬に出入して主従の約もなさざれど折々薪水の勞を助け（『送木兎坊序』（『羅の葉風』所収））

とあるから、中級から下級の武士（也有の親友で、『二度の笠』の序を書いている堀田六林は足軽頭）であろう。さらに別号として遁五坊風夕があること、也有の家来であり俳諧も嗜んだ文樵の手で剃髪したことが知られている。¹⁾

なお、

木兎は天明四年三月十九日を吉祥日として、金鯱城下の東郊上野山に庵に年来の願ひかなつて建中寺東堀端の寓居から移つた。

（中略 入庵記念「草結」といふ冊子）翌天明五年六月二十二日に不治の病を得て六十三歳でこの草庵に永眠してゐる。（鬼頭氏稿）

という。「草結」は未詳。

木兎坊の俳歴はどうか。

木兎坊の入庵前後から行脚にいたる時期、也有は特別ゲストのようになかたちで当時の名古屋の有力俳人不之庵木兎や蓮阿坊白尼の歳旦に入集しているが、木兎坊は入集していない。これは也有に心酔し、弟子を自称してはいても、俳壇において活躍する意志はなかったものであろうか。また、はるか以前寛延四年（宝暦元）の白梵庵馬州の歳旦に「木兎庵」なる人物が入集している。もしこれが木兎坊風石であるとするならば、当時二七歳、露川門の流れを汲む馬州に入門したのが俳諧への入口だったと考えることも出来るが、庵と坊と一字違いであ

り、『二度の笠』本文中「国の馬州も」などとあって、師に対する言及とは見えない。傍証もないので直接の門人である可能性は低い。

いずれにせよ、行脚にのぞむ木兎坊風石にとって唯一の俳諧の師であり、俳諧観の基準となった人物は半掃庵也であった。也有もまた二度の木兎坊の旅立ちに、それぞれ「送木兎辞」（明和八）「送木兎坊序」（安永五（推定））を草している。木兎坊の唯一の師が也有である、ということは訪問先にも大いに反映している。

二 行脚ルートと訪問先

『二度の笠』は、木兎坊二度の東北行脚の経緯を記し、巻末に也有をはじめ知友の連句発句を並べている。まず本文に沿った旅の行程と主な訪問先、入集者を一覧する。なお記号と番号は説明の便宜上使用しており、記号別にまとめて後述する。記号は、◎が也有及び鳴海の下郷（千代倉）家に関連するものと、土地の有力者、◇が修験に関連するものである。

明和八（一七七二）年奥州行脚

五月末、江戸 ◎1雪中庵蓼太亭、体調不良で長期滞在、水無月末江戸発↓松島等經由「細道」をたどる↓仙台「国にて約せしごとく」洛の◎2諸九尼に会う↓尾花沢を経て、十六夜↓大沼（山形県西村山郡朝日町大沼）へ行く◎3◇鸞窓↓根際（山形県東村山郡根際）の山明、川崎（宮城県柴田郡川崎）の陽十を訪問して、帰路へ↓仙台祭礼見物、常陸・筑波山登山↓下総（関宿）◎4阿誰亭に長期滞在↓師走、帰庵

安永三（一七七五）年 奥州・北陸行脚

弥生中頃 美濃帆引を出発

◇1武州御嶽山主（東京都青梅市御岳）山甲

〔句を並べている連衆の中で今寺の有隣・青梅の平爪は、松露庵（鳥酔）の『露柱庵記』（烏明編 宝曆十一刊）に入集。また山甲・平爪は同じく松露庵一派の『山と水』（烏明編 宝曆十三刊）に入集していて、このあたりの連衆は鳥酔系とみられる。〕↓下総関宿境（千葉県野田市）前回行脚の折歓待を受けた阿誰はすでに逝去。漸江ら入集。↓常陸 ◇2不動院↓小川（茨城県小美玉市小川）逗留、数日俳諧。左右ら小川の連衆

〔小川の左右・亀峯・仙枝・遊之・沙鷗・静河、水戸の活緑・文紅・両五、額田の五峰・浮来は、柳居遺稿記念集『茶の花見』（常陸那珂湊 買風編 安永元刊）に入集しており、このあたりすべて柳居系俳人。〕

額田（茨城県那珂市額田）◇3三日坊五峰↓仙台行脚 青木（宮城県登米市）經由↓奥州須賀川（福島県須賀川市）◇4桃祖・雨考↓会津若松◇5可直ら↓会津坂下 佳勇（沼木又右衛門）↓柳津（同河沼郡柳津町）◇6虚空蔵 一志。↓文月朔日 柳津を出る。会津坂下へ戻り、青木から村松へ↓小田附（福島県喜多方市）◎5巨石↓村松（喜多方市松山町）◎6里鶴↓出羽置賜地方 米沢↓小出（山形県長井市）◎7蘭舟↓荒砥（同白鷹町荒砥新戸）◎8斗哉↓最上根際 山明・守株（丁々舎）↓大沼（同朝日町）◇7（◎3◇参照）鸞窓（大行院雄英）下野の箕溪と落ち合う↓吉川の雲和は留守。湯殿山禁志津名主十兵衛宅へ行く↓羽黒（羽黒山）◇8三日坊の紹介、月坊宅↓庄内鶴岡連衆は留守で会えず。鸞窓の紹介で酒田の桜士宅へ行く↓酒田（同酒田市）仲秋、象潟見物などして、酒田連衆と風交。◎9百和が「也有公の流れを汲とめたし、とて市中庵といふ庵を建て仕ふ人など添へて」世話をしてくれたため、翌春まで逗留。↓酒田を出て、

熱海湯治などして、葡萄坂越え↓越後（新潟県）村上 岩舟↓葛籠山
 ◎10 緑扇↓中條↓芝田（新発田）↓笹岡を経て、現阿賀野市にある
 「八房の梅」見物↓分田↓新伊津↓沼垂（現新潟市内）◇9↓新潟
 ↓巻↓三条↓出雲崎◎11以南（橋新之助）↓柏崎↓泊↓三日市↓越中
 （富山県）「四十八が瀬を七夕にこゆる」↓魚津↓富山↓加賀（石川
 県）津幡◎12見風に会う↓小松 大聖寺。大聖寺で「盆過ぎの月」
 を詠む↓越前（福井県）丸岡 ◎13梨一に会う↓三国出村◎14哥川↓
 府中◎15之丸↓湯之尾峠を越えて近江入り、木之元・藤川を経て、美
 濃に入る。関ヶ原・養老の滝を経て帰庵。
 卷末に也有への挨拶及び尾張諸家の句を掲げる。

まず◎を付したのは、各訪問先の有力者である。その多くが也有及び名古屋鳴海の下郷（千代倉）家の日記に関する事項を持つ人物であり、順に検討していく。

◎1 雪中庵蓼太
 吏登門。雪中庵三世（一七一八〜一七八七）。江戸座に対して続五色墨を結成、江戸俳壇に重きをなす。宝曆八（一七五八）年吉野行脚の途中来名した蓼太は、半掃庵に也有を訪問。発句で挨拶し（也有脇）、鳴海の下郷（千代倉）家を訪問して、五代和菊（常和）とその弟蝶羅に対面している。和菊の日記七月廿七日の条に、「夕方江戸通り塩町、雪中庵蓼太と申点者、（中略）嵐雪翁道統のよし。」とある。（以下、日記はすべて森川昭氏『千代倉家日記抄』による。引用は『千代倉日記』と略称）
 也有と十年以上にわたる交誼をもっていた蓼太は、江戸に着いた木兎坊を歓待、旅疲れの保養のための逗留もすすめた。すべて也有からの紹介状ゆえであろう。

木兎坊が剃髪入庵した明和七（一七七〇）年、奥州行脚に出発する

晚台に也有は「送晚台序」を与えた。宝曆十三年（一七六三）『蛙啼集』によって蕉風復興を開始、也有の後ろ盾もあり尾張から次世代の全国区俳人となりつつあった三十九歳の暮雨巷晚台は、第一回の奥州行脚に赴く。この時晚台は江戸において初めて雪中庵蓼太と対面、続く仙台訪問によって仙台俳壇の隆盛といった流れを生み出していく。この晚台の訪問の翌年、木兎坊は雪中庵を訪れたのであった。
 木兎坊は、直接的には、晚台の行脚にかなり刺激をうけつつ、也有門下としての自負を持って、入庵の手始めとして行脚を計画実行したのである。しかしすでに晚台の影響下に入った福島や仙台の丈芝坊白居らを訪問したこと、またそこで一悶着あったことは、本書には一切触れられていない。

◎2 諸九

筑後の人（一七一四〜一七八二）。諸九は駆け落ちした相手である湖白（のち浮風）の没後剃髪。明和四年、京岡崎に草庵を結んだ諸九は、明和八年のこの年五十八歳、三月晦日に京を出立し、四月八日に名古屋着。大谷篤藏氏が「大江丸書簡集」『俳林間歩』（岩波書店一九八七）に収録）に翻刻解説された旧国（大江丸）書簡Bには、諸九は也有に面会したいと思っていたが、果たせなかった、とある。しかし木兎坊には会つたらしく、「国にて約せしごとく」仙台での邂逅を記す。ただし諸九の行脚紀行である『秋風の記』『湖白庵諸九尼全集 増訂版』（和泉書院 昭和六二）による）には、木兎坊に会つたという記述がない。その理由とも考えられる事情を詳述するのがさきの旧国書簡Bである。この書簡によれば、木兎坊は、也有の名を振り回し、福島や仙台の丈芝ら前年に晚台に親炙した人々の不興を買ったため、旧国が諸九ともども仲裁しようとした、ということである。『二度の笠』には、これらの有力俳人に会つたという記述もなく、晚台門として大きな勢力になる仙台や福島を、いわば無視すること

なる。これが先ほど触れた「一悶着」の実情である。旧国は、飛脚問屋大和屋善右衛門として全国七ヶ所に新店を持ち、仙台はそのうちのひとつであった。鳴海の下郷蝶羅らとも昵懇である。その旧国も、尾張名古屋の藩主御用人にして有名俳人も有には気を遣っている様子が書簡には見える。也有に心酔している木兎坊にとって、この時眺台はまだ新進の俳諧師にすぎなかったたのであろうし、当地の人々の反発や旧国のとりなしもたいしたこととは考えていなかったのかもしれない。

◎3◇鸞窓（花雲堂とも）

本山修験大沼大行院別当の山伏雄英。この人物およびその周辺については、前掲野田氏の論文に詳しい。ここでは、『千代倉日記』によって鸞窓と鳴海の下郷家とは長い交流のあったことが確認でき、また修験僧という身分が、俳諧師の行脚同様の役割を果たし得た、と考えられることを指摘しておきたい。名古屋近辺での鸞窓の足跡は宝暦四（二七五四）年の来名、鳴海訪問がその始まりである。

宝暦四 亀世（四代鉄叟）日記

十月廿六日 羽州大沼村大行院白蓋、誹名鸞窓被尋誹諧有。

市中や笠着て遊ぶ冬牡丹

咄しつとく淡き茶の花

挨拶

咄しさへかくも小春の遊び鳥

以下、宝暦十一年二月から三月にかけて書状のやりとりがある。明和二年にも書状が来ており、明和五年学海（六代亀洞）日記には、

三月八日 羽州大沼山浮島奉納勸進二付、東店迄短冊認遣。

浮島やはな咲かたへ遊ぶとは

鸞窓門人青萩と申俳人、東店泊ある二付遣す。

また同時期の和菊（五代常和）日記には、

京都俳人、羽州俳人兩人蝶羅同道にて来、笈見せ遣。

とあることから、浮島稻荷の奉納額の一つ（野田氏論文に触れられているB額であろう）の具体的な勸進の様子が明らかである。勸進の使いをした羽州俳人（青萩）は、同家所蔵の「芭蕉の笈」を拝観して、短冊を受け取っている。無論也有も、この浮島稻荷奉納額に句が掲げられている。

也有と下郷（千代倉）家とは、例えば寛保四（一七四四）年三月には、日記に「横井也有御加増ご祝儀」とあり、また益暮れ等折に触れての贈答、参勤の折の休息といった交流が長く続く。共通の話題として、この出羽大沼の奉納勸進の話も出たであろう。なお橘南谿の『東遊記』卷之五の三一「浮島」の項には、「其山主を大行院といふ。修験道にて俳諧の数寄人、俳名を鷹窓といふ。」（平凡社刊東洋文庫二四八『東西遊記 1』による）とある。南谿が当地を訪れたのは天明六年であり、名前が一字違いであることから、同一人か、未詳。

◎4阿誰

阿誰は、下総境河岸（現・茨城県猿島郡境町）箱島善兵衛（養子 二代目）、名を布慶、関宿藩御用商人、大名主。巴人門の高弟であり、のち存義門。別号楞齋など。安永元年十二月十三日没（六二）（関東俳諧叢書第十四卷加藤定彦氏稿による）。大谷篤蔵氏が紹介された「蝶羅宛阿誰書簡」には、霜月十六日付で、

木叟奥羽行脚二付御添翰、此地しバラく杖を留られ、何卒当年中もと、杖笠を隠し候へ共、去りがたき御やうす、無是非立別れ候。

などとあり、明和八年の長期滞在を示す。二度目の安永三年夏の訪問では、阿誰は亡くなっており、子の浙江（本文は漸江）の歓迎を受けたとされる³。阿誰は当地の豪商にして俳諧好きであり、同様の立場の下郷家との交誼があった。木兎坊は、その添え状を携えていたからこ

そ歓迎されたのである。

◎5 巨石

関本氏。地藏堂派可直（◇5参照）・而后の甥。小田附（会津喜多方）グループの主宰。子息は如髪。屋号越前屋。地藏堂派の後継者とされた。（井上隆明氏稿による）⁴なお会津から也有を訪ねるものがあつたことは、『新ありづか』（『横井也有全集』発句編所収）に、

会津より来りて句をよせける三人へ返して遣す、風の薫りそつとしたふや峠から、の返し

麦糠の庵へも風の薫りかな と会津の客あり

とあることから明らかであるが、木兎坊と巨石との付合の前書きに「国へ行脚せし人にて他ならず」とあるので、この内の一人の可能性もある。

◎6 里鶴

佐藤氏。小田附から派生した村松新田グループに属する。彼ら小田附グループは、「会津俳壇の全盛期をなした」上、「安永〜文化期にわたり若松城下をしのぐ」という。（井上氏稿）

◎7 蘭舟

羽州小出村（山形県長井市）の俳人横沢源内、安永七年没。貞門伊藤信徳門の京俳人植村信安と米沢置賜地方の俳友によって編まれた『ほたる行脚』（享保十五序）に入集。（『長井市史』二巻）のち玄武坊の俳人名録にあり。なお本文に「先年国の馬州も行脚せしと也」と記すのは『奥羽笠』（元文五刊）の旅のことである。

◎8 斗哉

羽州荒砥の富商大貫国寛衛足。叔母が置賜に美濃派を興す小出の川崎涼花の妻。涼花は明和元年、五竹坊を訪問、これをきっかけにして以哉坊は翌二年米沢を「正風の普及」の為訪問した。これが置賜美濃派のはじめとされる。（井上氏稿）

◎9 百和

「也有の流れ」を汲む木兎坊を歎待、世話した百和は詳細不明ながら、緑扇（後述）編汗虹追善集『暁の空』（天明六序）の中巻「諸国」入集者に「酒田」のトップとして名を連ね、木兎坊が百和の紹介で訪ねたと考えられる大山の草父も同書に入集している。この諸国入集者を見ると、荒砥（新戸）の杜哉など各地の有力者が入集しており、百和は汗虹とも親しかった当地の俳諧の中心的存在と考えられる。

◎10 緑扇

葛籠山の人。斎藤源九衛門。越後に美濃派を広めた汗虹の門人。天明六年には、汗虹十三回忌追善『暁の空』を編集した（『新潟県史』通史編4 近世二）。なお『暁の空』には木兎坊の越後の訪問先のうち、新発田の豊井（石川治右衛門）・新津の夕蘭・沼垂の有奥坊が入集している。

◎11 以南

出雲崎の名主、橘新之助（一七三六〜一七九五）。良寛の父。はじめ美濃派に近づくも、暁台来越を機に暁台門となる。

◎12 見風

加賀津幡の人。河合氏（一七一〜一七八三）。加賀金沢の希因（支考のち乙由に師事、北陸伊勢派の雄）門。

◎13 梨一

江戸出身、柳居門。代官所役人で、宝暦十二年頃越前丸岡に隠棲。加賀の蘭更・京の蝶夢らと交流。蕉風復興運動に寄与。『奥の細道菅菰抄』等の著者。

◎14 哥川

三国出村の人。諸国の撰集に入集。也有と交流。⁵

◎15 之丸

武生の人。麦水門。斎藤耕子氏『若越俳人列伝』（私家版）に「美濃

派一辺倒の武生では珍しく、専ら加賀俳人と交流」とある。

次に◇を付したものは、木兎坊が訪問した修験関係者である。

修験道は、本来役小角を開祖とし、山中に入って難行・苦行を嘗めて、靈験を修得することを業とする。本山派修験(天台山伏 聖護院を本所とし、熊野三山を修行の場とする)と当山派修験(真言山伏 三宝院を本所とし、大峰修行)に分かれる。また、

江戸時代に入って、幕府は、各地を遊行することの多かつた修験者を本山・当山いずれかの派に所属させ、地域に定住させて、両派を競合させることで修験道を統制しようとした。これにより、修験者は地域社会の種々の要求に答える呪術的な宗教活動を行なった。また、江戸中期には、庶民の中にも山岳信仰が広まり、富士講、木曾御嶽講など各地の修験者を先達とする講が盛んになった。(『日本国語大辞典』による)

剃髪入庵した木兎坊は、言わば「町修験」といったかたちをとっていたという可能性も考えられる。なお「町修験」については、宮本袈裟雄氏の、

「定着性が稀薄」な町修験(中略) 武家や市中の祈願檀家に神楽や竈神祭、正・五・九の祈祷配札などを行なっているといわれる点や、(中略) 鎮守社の別当職の任に当たっている者が少なくないことなどからみると、町修験の宗教活動そのものは農村部居住の修験と大差ないと思われるものの、都市型が示す信仰、つまり個人的な信仰が中心を占め、流行神的性格をもって普及することが多い信仰形態を勘案すると、定例の祈祷よりも治病を中心とした個人的な臨時の加持祈祷が盛んになされたものと推定されよう。その意味では、流行神の様相を帯びて江戸市中に普及した稲荷社の別当職をとめる修験が少なくない点が注目され、稲荷信仰の

普及に修験者が深く関わっていたとみるべきではなからうか。

との指摘が、参考になる。

俳諧師の行脚に関連して、修験者達のつながり、もしくは、その移動可能な身分というものは、注目に値する。木兎坊行脚の場合、訪問先は修験に関連するものが少なくない。以下行脚順に検討する。

◇1 武州御嶽山主 山甲

御嶽神社(東京都青梅市御岳)は、近世には御師団も編成されていた御嶽信仰修験の山である。「約にまかせて」とあるから、すでに相識の間柄であったと考えられる。このことは、剃髪した木兎坊が、いわば町修験といった立場のものに近かつたのか、或いは山甲が来名した折に会ったのか、といった可能性を感じさせる。山甲は御岳の御師ではなく、山主とあるからは、たやすく諸国を往還できたのか疑問だが、いずれにしても仲間や弟子を含めて修験という立場の可動性は重要である。

◇2 「常陸の不動院へは、花の天王坊より枝折ありて」(十一才)「水戸御城下神崎寺へも天王坊の枝折を出して」(十二才)とあるが、いずれも修験のつながりではないかと考えられる。巻末の帰郷後の連句の中にも、「山臥の名は仰山な不動院」という付句がある。

天王坊については未詳。常陸不動院は現・常陸大宮市にある真言宗不動院で、現在も修験道なる地名が残っている。現・水戸市天王町には、真言宗豊山派の神崎寺がある。

◇3 額田(茨城県那珂市額田) 三日坊五峰

三日坊は、◇7の羽黒の月坊を紹介しているところから見て、修験同士の関係か。『秋風の記』(前掲)によれば、諸九は明和八年六月朔日、額田の三日坊宅に一泊している。

◇4 奥州須賀川(福島県須賀川市) 桃祖(二階堂 徳善院の修験僧

其角門の藤井晋流門）・息の雨考と入集。

徳善院は本山修験の寺、可伸庵近くにある。明治に廃寺となる。

◇5会津（福島県会津若松市）可直ら

可直らは、竜吟堂運我をはじめとする若松中村地蔵堂の修験グループで、元文四年に刊行された『陸奥の富士』によってその規模がわかる（『福島県史』、『会津若松市史』）という。『陸奥の富士』は会津若松市会津図書館蔵。本書によれば、グループの康三堂松原は上洛し、芭蕉追慕のため大津義仲寺を参詣した。フットワークのよさは修験ゆえか。

なお、宝暦七年の『千代倉日記（亀世）（和菊）』には、

六月廿三日 奥州会津山伏耕水誹諧師二而蝶羅宅二泊（亀世）

（廿九日まで逗留。誹諧および法花講訳あり）

九月十六日 今夕会津耕水丈上方より下り之由にて御寄。（和菊）

（廿五日まで逗留）

とある。

◇6柳津（福島県河沼郡柳津町）虚空蔵

虚空蔵は現・圓蔵寺、弘法大師ゆかりの寺。「奥之院といふ寺一志子に宿る」（十四才）とある。奥の院は隠居寺という。一志については未詳であるが、修験の可能性が有る。

◇7大沼（山形県朝日町）鸞窓（大行院雄英）

前掲◎3◇参照

◇8羽黒 三日坊の紹介、月坊宅。羽黒修験の宿坊である。

◇9沼垂（新潟県新潟市）有奥坊も修験か。

◇なお柏崎において、「国の鳥黍坊もありて会す」（廿七才）とあるものも修験関係か。

三 木兎坊行脚の特色

『奥の細道』を辿る旅は、全国的に俳諧人のあこがれとなりつつあり、中興俳諧前夜、芭蕉五十回忌以降さらなる高まりを見せ、直接の蕉門俳人以外に及ぶ。奥州路では、地元の人々が行脚俳人達に迷惑していた実情を示す記事まであるが、こうした中、木兎坊に直接に影響を与えたのは、明和七年の暮雨巷暁台の奥州行脚であろう。芭蕉の足跡を辿ることは木兎坊にとっても重要であつたはずだが、也有門人であるという旗印はさらに重要であつた。

二度の行脚の行程、訪問先は、松島、象潟を重要なポイントとしてはいるが、より周到な準備が見られる。それは也有の紹介先と也有が親しんだ系統の人々、そして修験関係者のネットワークとも言える一連の関係である。

◎を付した十五名は行脚中の主な訪問先で、也有と早くから文通、もしくは面識のある人々か、土地の有力者である。また◇が修験関連と見られる人々である。

まず明和八年の行脚において、木兎坊と名古屋で面識のあつた諸九は別として、蓼太・鸞窓は也有と長く交誼のある人々。また例えば下総の阿誰が鳴海の下郷蝶羅と親しかったことは、書簡の存在から見て明らかで、一方木兎坊は「（明和八年）四月十六日 名古屋俳人木兎坊風夕笈^{フキ}拜見ニ来ル」と『千代倉日記（和菊）』にある。その六日前には、諸九・旧国が同家を訪問している。木兎坊は芭蕉の笈を拝見旁、阿誰への紹介状を受け取りに旅立ちの前、四月に鳴海へ出かけたものと見える。無論也有が蝶羅に依頼したものに違いない。

つまりこの年の行脚は、殺生石や笠島から松島見物、尾花沢を経由、「細道」を辿ることを意識はしているが、出羽の大沼まで足を伸

ばすのも也有の知己がらみ、また修験がらみと考えられ、帰路の立ち寄り先まで十分に検討、也有とも相談し、添え状持参の旅であったと考えられる。それゆえ『二度の笠』にはうかがえない木兎坊の暁台を軽視するような言動が生じて、二で触れたような物議を醸したのである。

次に安永三〜四年の旅は、◇1〜7まで並べてみると意外なほどに、修験関係の人物を訪ねており、しかもそれが各地の有力者と見られることが、興味深い。

木兎坊は、御嶽山主の山甲とは「約にまかせて」とあって、かねて訪問予定のところであった。以降一覽したように、須賀川の桃祖も修験にして俳人、会津俳壇に一時期を画する地藏堂修験グループ、その中心人物の一人可直の甥で、喜多方の豪商関本巨石は、のちに小田附グループの主宰となる。撰集もあり、相当数のメンバーを誇ったものようである。也有のもとに「会津より来りて句をよせける三人」（前掲『新ありづか』）があり、時期も名前も明らかではないが、これらのメンバーも修験、もしくは尾張まで足を伸ばすことのできた商人と考えることもできるのではないかと思う。修験という可動性と俳諧が、意外に結び付きやすいものであったことは確実であり、土地の有力者（商人）を交えて、多彩な交流が可能となったのであろう。

なお木兎坊は本来武士身分であるが、行脚中、例えば米沢の武家の俳諧愛好者と交流した形跡はない。また也有は享保末年、三十代前半から隔年の江戸詰の間に江戸の柳居（麦阿）と親交を深めたが、この也有と親密であった柳居門流の者達を中心として、土地の有力者を訪ねたのが木兎坊であった。それは一覽したように、句会を催しているメンバーが、ほとんど柳居の流れを汲むものであること、また下総の阿誰や、喜多方の巨石、出羽荒砥の斗哉などといった豪商、有力者を

訪ね、その縁によって交流を広げていること、に明確に示されている。

土地の有力者であって、後年玄武坊ら美濃派を歓待する人々もある。ただし井上隆明氏が指摘されたように、彼らは余裕をもって行脚俳人達と応対しており、従来言われているような美濃派一色といった動きではなく、有名俳人が訪ねてくれば、歓迎し、句会を開いてもてなす、といったかたたちが土地の有力者にとっては普通のことであった。こうしたことは『千代倉日記』にも明らかであり、地方においては新しい風を知る機会として重宝されたのであろう。

四 おわりに

木兎坊風石は、行脚に際してことごとく也有の言を尊崇したものである。前述した旧国（大江丸）の書簡は、前年の来訪以来暁台に親炙した福島の呑溟や仙台の丈芝らの怒りを買った木兎坊の様子をつぎのように述べる。

然所件之木子、先福嶋へ御立寄、かの地呑溟方へ被参候而咄候次手、いか成事にや、暁台事いまだ未熟之俳諧と、ケ様御申有之たよし、依而呑溟腹ヲ立候而、一宿も不致、

（中略）

夫二なごやのゐん居く〜と被申、一卷也有君之御書被成候ヲミセ被申候。仙台ハ国自慢之日本一ト存候処へ、なごや之御貴侯俳諧ハ日ノ下二無と御申故、下地之暁台ニ腹黒く存上之腹立二而、又々散く〜二申候。

木兎坊に崇められた也有は、しかし蕉風の真の姿に思いを致す人物であった。

昔の軽口道戯の躰を捨、詩歌と雅趣を同ふし、俗語平話を用ゆれ

ども向上の風体となせる事は全く芭蕉翁を開祖といふべし。正風俳諧の伝といはゞ只是のみ。
（也有『非四論』）

と断じて支考流（美濃派）を嫌い、蕉風の何たるかを考える也有は、博学多才の人であり、俳諧は趣味であったにもかかわらず、その俳諧論は明快である。木兎坊にとつては、どうであったのか。

松島やかはらぬ中に秋の空

朝がほの垣にも残る暑さかな

といった発句は平凡の域を出ない。ただ木兎坊が修験のネットワークと也有の人脈を駆使して二度の行脚を敢行したことは、具体的に確認できた。

同時代の暁台の東北行脚が、仙台をはじめとする東北俳壇に多大な影響を与えたことを考えると、その差は歴然としている。暁台の旅は自己の俳諧を誇示し、勢力を扶植しつつ行う俳諧師の行脚の典型であり、木兎坊と暁台を同列に扱うのは酷に過ぎるかもしれない。

補・野田千平氏前掲論文には、鸞窓と修験について以下の指摘がある。

也有が鸞窓からの求めに応じた「笠の次手序」の中に、鸞窓には「掛錫の所々、或は其地に問訊の句共を掲て笠の次手といへる一集梓行の志あり。」という部分がある。「掛錫」は鸞窓にとつて山伏としての修験行脚であり、その途中「笠の次手」なる予定の撰集に入れる句を集めたというのである。俳額のかなりの部分もこのようにして集められたのであろう。この先蹤として筆者が知るものでは享保十四年六月、晩年の各務支考のもとに出羽国久保田上堀自覚院の山伏也柳が訪れて『秋田蕨』を編み、同年冬越中国泊の山伏洗耳が訪れて『伽陀箱』を編んだ例がある。陸奥国白石の山伏松窓乙二もこの系譜につながるのであろう。

『二度の笠』の原本閲覧をお許しただいた伊藤圭太氏に深く感謝申し上げます。また『翻刻『二度の笠』』は雲英末雄編『江戸書物の世界』（笠間書院 平成二十二）に収録いたしました。

注

(1) 野田千平氏紹介『藻塩草 十五』による。「横井也有全集下(2)」（名古屋叢書三編一八）(2) 名古屋市教育委員会 昭和六十の「羅の葉風」解説参照。

(2) 大谷篤蔵氏「千代倉来簡抄」所収蝶羅宛阿誰書簡解説には、阿誰の子折江閑鵝である、とされるが未詳。なお「千代倉来簡抄」は『俳林閑歩』（岩波書店 一九八七）に収録。

(3) 注2参照。

(4) 井上隆明氏『東北・北海道俳諧史の研究』（新典社 平成十五）による。以下、「井上氏稿」と略称。なお井上氏は、「東北農村への正風波及は芭蕉五十回忌の寛保三年（一七四三）ごろからで、本格的には七十回忌の宝暦十三年（一七六三）以降だった」とする。

(5) 哥川と也有の交流については、野田千平氏「越前三国の遊女哥川——木兎坊・白尼・八亀・春波・木兎坊」（『近世東海俳壇新攷』所収）参照。

(6) 最上金山の羽長坊「鷲山夜話」など。（井上隆明氏注4による）

(7) 也有の俳論。写本。享保頃まとめた『短綆録』を書き直したもの。支考の『俳諧十論』を批判する。翻刻は『横井也有全集 中』（名古屋叢書三編 第十七巻）所収。